

## 島田雅彦論

和田勉

一

島田雅彦は、『偽作家のリアル・ライフ』(昭61)の中で、「文学賞の選考委員には分子生物学者や文化人類学者、外国人を迎えたい」と述べている。なぜなら、「文学者特有の情緒的な感じ方を廃した社会科学的な視点や自然科学的な思考もまた小説に援用することは自ずと小説の枠を広げることになる」というのである。ここには、他の諸分野と交流することで、従来の「文学」というカテゴリーを意識的に壊そうとする姿勢が窺える。

遺伝子に関心を持つ島田について、その文学の特質を分子生物学の視点から明らかにしたい。何故、島田が遺伝子に関心を持つようになったのか。その文学の特質が、遺伝子をキイワー

ドにすることによって、どのように明らかにされるのか。吉田熙生は「作品論の方法」(『別冊国文学』昭58・10)の中で、「自己の研究対象とする〈作品〉を熟読して、その作品の特質を解明するのに最も適切な〈方法〉を案出するほかないのではないかと述べているが、本稿では、作品のみならず作家を解明する適切な方法として分子生物学の視点を援用してみたい。分子生物学が切り拓いた学問的な成果を積極的に文学に摂取することで、島田の文学の質が、従来の文学からどのように変容しているのか考察する。

島田の文学と遺伝子との関わりについて、特にそれが表されている『天国が降ってくる』(昭60)「ある解剖学者の話」(昭60)「僕は模造人間」(昭61)「ドンナ・アンナ」(昭61)「ロココ町」(昭61)「未確認尾行物体」(昭62)「ユダヤ系青二才」(昭62)「アルマジロ王」(平1)を中心に分析したい。<sup>1)</sup>

ところで、島田は『偽作家のリアル・ライフ』の中に、「ぼくは大学二年の時、文学青年の真似はやめることにした。文学修業の代わりに文学研究をすることにしたのだ。ロシアフォルマリズムの論文集を読んで、文学は科学的でなければならぬと思ったのだ。もちろん、文学を科学の体系にすっぱり収めることはできないが、少なくとも何が体系からはみ出ているのかを知ることができる」と記している。また、『愛のメルシュトレム』(平3)の「プロローグ——せっかちな自伝」の中でも、

作家としてデビューした頃、ロシア・フォルマリズムを自己の創作の特質としていたことを回想している。島田におけるロシア・フォルマリズム摂取の特徴としては、文学を科学的に解明すること、及び詩的な言語を意識的に拒否すること、更に、現実を認識する際に異化の手法を導入すること等が挙げられる。このようにデビュー当初から意識的、戦略的な書き手であるだけに、その作爲の意図を客観的に見極めるように心掛けたい。

二

それでは次に、具体的に作品に即して分析していくことにする。

『天国が降ってくる』について、評論『永劫回帰マシンの華やぎ』（昭63）の中で、「男は自分がもっている遺伝子はいまの自分の姿の元凶というか、起源であると思っっているのです。だからその起源をつぶしてしまえば、自分はいかなる束縛からも自由になれるという幻想を抱くのです。（中略）いつさいの拠所をなくして、ギリギリのところまで行って、もう自分の遺伝子の毒が中和化されたほとんど何ものでもないものの遺伝子みたいなものと出会えるだろうみたいな、そういう幻想を抱きながら生きていくのです」と述べている。主人公の真理男は、先祖代々の人達に捕われないように生きようとしながら、その呪縛

をかえって意識してしまうところに、この作品の特質もある。血縁につながる時間的な束縛から逃れようとするのみならず、モスクワまで出かけることで空間的な束縛からも逃れようとするが、まったくの自由人には容易になれないことを主人公の言動は示している。

冒頭には「若い遺伝子たちの肖像」という見出しがあり、そこには家族の伝記が青年期を中心に記されている。真理男やその父や祖父などを、それぞれの遺伝子と把握しているところが独特である。真理男の出生については、「昔々、名もなく性別もない一個の受精卵があった。細胞分裂を繰り返していくうちに大きく、重く、複雑になり、ある日、表面が紫色の二グラム足らずの心臓付きの物体になって、重力が作用する世界に転がり落ちて来た」とあり、受精卵の段階から生命体として捉えている。祖父が亡くなった後についても、「遺伝子に姿を変えても残る」という捉え方をしている。また、真理男は没落貴族葦原家の「遺伝子と手を切りたんですよ。あなた方と同じ誤ちを繰り返すなんてまっぴらですからね」と言うが、親族からは、「遺伝子と手を切るってことはな、おまえ、人間ではなくなるということだ」と諫められる。遺伝子の存在をいかに重視しているかが分かる。

ところで、真理男の語ったことに、「テレビは膨大な情報を食っては排泄する。この繰り返しを続けている限り死ぬことはな

い。人間もDNAの情報をリボソームで翻訳してタンパク質を生み、何とか活動している。この繰り返しだ」とある。このような真理男の考えには、作者自身が、随筆集『語らず歌え』（昭62）の中で、「人間はDNAの情報をリボソームで翻訳してタンパク質を生産しながら活動する有機的生物であるが、テレビはやはり膨大な情報を仕込んで排せし、活動している無機的生物といえるだろう」と述べていることが活かされている。人間をDNAの情報をもとにタンパク質を生産しながら活動する、テレビと似たようなものと捉えているところが独特である。

なお、柘植光彦は、『天国が降ってくる』——内部メディアとしての構造破壊」（『国文学』平11・7臨増）の中で、結末の場面を引用した後、『真理男は二人の体から離れて』という表現に至ると、人物と精子（遺伝子）がはつきりと分離・独立したかたちになり、真理男は受胎が実現された後の精子のぬげがらとして、あたかも幽体であるかのような位置を与えられ、読者に『内部メディア』としての『構造破壊』の存在を突き付けることになる」と述べている。確かにこの近親相姦の場面では、精子の視点から人間の営みが客観視されており、「無数の僕がうじゃうじゃ泳いでいる。怪我をしている奴もいるな。どうしたんだ？ 尾が切れた。しっかりしろ。いや死にそうだよ。一緒に卵たまご子こに会いに行こうぜ。おい、おまえそんなに慌てるなよ」ともある。意識を持った精子たち、つまり遺伝子たちの視点から描

くことで、ヒトの原初の姿が異化されて描き出されている。

因みにこのような視点から描き出すことは、山折哲雄の「つい最近までは『人生五〇年』という人生観が一般的だったのに、あつと言う間に『受精卵から脳死まで』という時代になってしまったま」というような言説を想起させる。だが、作品として見れば、想像の質に疑問も残る。それは、遺伝子という誰も実感できないものを、科学を踏まえてはいるものの想像力によって擬人化して描き出す難しさにも起因していよう。それでも、結末部でのコンピュータによる未来社会の造形よりは説得力があると言える。

「ある解剖学者の話」では、解剖学者と遺伝学者の議論の中で、遺伝学者が、「科学者は実験室でできることを敢てしないということがよくありますね。例えば、人間の発生の段階で遺伝子にバイアスをかけて、人工的に奇形児をつくることができる。私は許されればやってみたいですね。放射線を作って突然変異を起こせば、人間以上のものが生まれる可能性がありますからね。（中略）ここだけの話ですよ。でも、ヒトラーのクローンを実際につくりたいもんですね。遺伝子工学がそれを達成するのは時間の問題ですからね」と述べる。この後、解剖学者との議論によって問題点を深めるといふ方向に進んでいるわけではなく、あくまで遺伝学者の想念という形で出されている。

このような話には、随筆集『偽作家のリアル・ライフ』の中

の、「人間は互いに見世物であるという時代はやがて終り、人間は機械にとつての見世物となるだろう。思考する機械には敵わないのだから。早く遺伝子工学を駆使して新しい人間をつくるべきだ」というような作者の考えが投影していよう。このような優生学思想は、さまざまな議論をされ続けてきた。科学的な外観を装って現れるものの、そこにはイデオロギーが複雑に絡み合っている。タブーに挑戦していることは評価できても、その主張そのものには問題も残る。

『僕は模造人間』の冒頭には、主人公亜久間一人の胎児かすひととしての意識が記されており、出生以前が重視されていることが分かる。また、「人の一生というのはだね、生まれる前から決まっておるのだよ。環境が人に及ぼす影響なんて、たかだか二十パーセントだね。蟬の奴を哀れむほど立派ではないのさ。光の世界でできる仕事はせいぜい木にとまって騒音をまき散らすか、捕虫網を持って追いかけて来る奴に小便をひっかけるくらいなんだよ。人間がこれまでやって来たことは蟬の仕事と変わらんではないか。皆、分子の運動だよ。万物は一の繰り返しなのだ」とある。「皆、分子の運動だよ。万物は一の繰り返しなのだ」というところには、遺伝子が意識されており、しかも、環境が人に及ぼす後天的な影響以上に重要であると考えていることが分かる。人間の優劣や性質を決めるのは、遺伝か環境かというのは長く議論されてきたことであるが、島田は遺伝を重視し、し

かも遺伝子を主体的なものとして扱っているところが独特である。

第三楽章「賭博者」では、真弓の前で、亜久間は本能のままに生きることを拒否する行動に出るが、真弓には理解されない。遺伝子に操られる恋愛ではなく、個別の恋愛を成し遂げたいという願いも叶わない。

結末の章には、「人間は〈僕〉や〈私〉という部分と亜久間一人とか三島由紀夫といった模造人間の部分とが強引に合成されたものだ。〈僕〉は遺伝子とタンパク質への翻訳機械、有機的な器官から成る。そして、模造人間は他人の意識の中に住む〈僕〉の幻であり、〈僕〉の意識の中に巣喰う他人どもの幻である。人間はこの二つの部分がよじれてつながっているからおかしなことになる」とあり、自殺しそこねた「僕」は、亜久間を含めたヒトというものの存在の意味を客観的に認識するようになる。一方、自ら死を選んだ亜久間は、遺伝子に操られるままに生きること、自殺によって拒否してみせたということである。ここには、遺伝子によって作られて先天的なものである〈僕〉と、後天的に形成されて固有名詞で呼ばれる亜久間のような模造人間によってヒトが成り立っているという考えが示されている。つまり、ヒトは主体的な存在ではなく、両義的な存在であるという認識である。そのような自己認識のせいもあるが、亜久間は模造人間として、知性的に多様な人間を演じることを快樂と

している。自分以外の何者かに変身したり、普通の人とは異なる言動をすることを好んでおり、それは遺伝子の操るままに生きることを拒否することでもあるが、所詮は遺伝子の呪縛から免れられるわけではない。

ただし、作品としては、このような登場人物による説明を必要としないところまで、象徴させて描き出すべきだっただろう。また、悲劇的な生に自ら殉じた三島に比べると、島田は言葉や観念の戯れとして、パロディでしかないという物足りなさも残る。

「ドンナ・アンナ」では、王子がアンナに「ぼくは……真面目な学生でした。毎日、分子とつき合っていました。生物を細胞の集まりとして捉えるんじゃないかって、分子の集まりとして捉えるんです。退屈な学問ですが、機械みたいに真面目に勉強してました。ぼくなんか、人間をバカにしてみましたからね。分子レベルで見れば、人間も犬もアメーバも同じようなものですから。(中略)分子生物学者の多くは今、心について考えています。小学生の道徳みたいに。バカバカしいったらありやしない。利巧な哲学者だったら、たぶん『心という言葉を使うな』というでしょうね。全く、分子生物学なんてやっていると悲劇ですよ」と語る。この王子には、人の身体が部品によって成り立っているという考えがあり、自己の存在の希薄さ故に他者との違いの乏しさという観念も抱えている。

因みに、石浦章一は、「『人間の心を科学で解明することができるのか』というテーマは、科学者にとって究極の命題であり、そもそも『心とは何か』を定義することすら非常に難しい問題」と述べている。また、木下清一郎も『心は遺伝子をこえるか』(平8、東京大学出版会)の中で、「心とは先天的に与えられているものなのか、後天的につくられるものなのか、という問いは、受容された『感覚』と、これをもとにしてできあがる『認識』をつなぐ神経回路のすべてが、遺伝子の情報によって決定されているかどうか、という問いになり、その究極的な解決に至るには、膨大な神経回路の接続のすべてについてこれをあきらかにしていけばよいことになる。しかし、これが近い将来にあきらかになるとは思えない」と述べている。

なお、『ドンナ・アンナ』の「付録」に拠ると、創作動機は、「女性の子宮の中を泳ぐ精子のような気分」を「様式美の中に収め」ようとしたとのことである。このようなことは、作品内に引用された楽劇『ばらの騎士』に比べると、「ドンナ・アンナ」には、作者の意図ほどには表出されているとは言えない。聴覚にすぎるハッピー・プリンスによって表そうとしたのであろうが、王子とアンナという実在の人物にリアリティがありすぎるために、『ばらの騎士』ほどの象徴的な寓話とはなり得ていない。それは、遺伝子レベルのことを作者自身が実感できないことにも因るだろう。更に言えば、このような実験的な試みに、

どのような文学的な意義があるのかということも改めて問われねばなるまい。浮遊感そのものの文学的なイメージ化と言えば妥当なのであろうが、その根底には、個人の存在の希薄さと背中合わせに、目に見えない遺伝子に焦点を当てようとしたというようなことがあるのだろう。

『ロココ町』では、主人公の「ぼく」はロココ町の住人から、「情報管理センター」の中の遺伝子情報研究所に行けば、便宜を図ってくれますよ。あなたに関する情報もファイルの中に収まっているでしょう。あなたがお望みなら、その情報を書き換えしてもらおうといいでしょう。別人になるチャンスですよ。この際、過去の自分と別れて、未来を生きるのに適した人間に生まれ変わった方がいいですよ」と言われる。更に、「人間というのは遺伝子の情報を複製する機械に過ぎないんです。それ以上でも以下でもありません。自分の遺伝子がどういものか知らない以上、あなたは御自分のことを何一つ理解していないことになりました」という考えを押しつけられる。ここでは、遺伝子のプログラムを書き換えることで別人になる可能性があることを示唆される。人間を固有の存在と考えるのではなく、遺伝子のプログラムという情報に支配される存在として捉えていることが示されている。その意味では、「ロココ町」は、近未来社会の寓話ともなり得ている。

また、遺伝子情報研究所の副所長は、「あなたは自分の可能世

界の一つを遺伝子分析によって体験できたんですよ。それこそ、こうあったかも知れない自分というのは自分の遺伝子の塩基配列の順列組み合わせの数だけあるんですよ。DNAのテープには四種類の塩基が何億何兆と書き込まれているんです。その順列組み合わせといたら、もう数の桁がないくらいだ」と語る。ここには、遺伝子分析によって、他の人生を体験できたことが明らかにされており、それは現在の生を相対化する視点としても用いられている。

なお、ロココ町で不可思議な光景を目撃し続ける主人公は、「もうそれらを奇怪だとは思いません。これほど贅沢なカオスはない。何の意味があるのか考えても、脳のエントロピーが増大するだけだ」と思う。このように人間の精神活動も、脳内物質の働きとして捉えているところに島田の特色がある。<sup>注4</sup>

三

『未確認尾行物体』では、エイズに感染したルチアーンは、「エイズって人間を根本的に変えてしまうんですよ。エイズの病原体はレトロウイルスの一種であることは先生もよく御存知ですわね。聞くところによると、このレトロちゃん、逆転写酵素とかいうのを持っていて、DNAになったり、RNAになったり、変身がうまいんですって。だから、人間の細胞の中にまんと

忍び込んで、いい加減な情報を流して、免疫系を大混乱させてしまうそうです。免疫系のコントロールが効かなくなった人間なんて、人間とはいえませんが。いろんなウイルスが人間の顔をして歩いているようなものですから」と述べる。この台詞には、エイズについての学問的な知識がそのまま用いられている。また、この台詞と同様のことは『愛のメルシュトレム』にも記されており、そこには更に「いかなれば、エイズ患者はハイジャックされた飛行機であり、主権を持たない国家である」と喩えられている。ただし、『未確認尾行物体』では、「エイズはその人の生き方を変えてくれる親切な教師みたいなもの」と喩えられている。作品内の登場人物では、エイズそのものになっってしまうようなルチアーンや、エイズ感染が分かった後、自分の生き方を変える笹川などとして表出されている。

ルチアーンの記事には、「あたしは自分とエイズの区別がつかなくなった。あたしがエイズにかかったのではなく、エイズがあたしになったみたい。夢を見ているのかしら。目に見えるものがあたまにしみたいだけ。何だか、だんだんあたしの体をつくっている膜が薄くなっていくみたい。ところどころに穴が開いて、そこから空気が漏れるみたいにあたしの血やあたしの考えていることが逃げていくようだわ」と記されている。ここには、主体となったエイズウイルスからの視点が前面に出てきており、それに伴ってヒトの意識が希薄になっている。

結末では、エイズが人類に向って、「君たち人類は個体が癌にかかることで種の進化を達成してきたんだ。君たちの遺伝子の中に癌の遺伝子が組み込まれたおかげで、進化できたんじゃないか。ぼくたちはDNAを持っていないけど、RNAこそ進化の鍵を握っているってことは君たちも最近、やっと気づいたみたいだね。そうさ、ぼくたちが君たちの遺伝子の中にこれまでにない新しい情報を持ち込んでやるおかげで、将来の進化が約束されたようなもんじゃないか。人間はDNAという神が作ったものだと考えるのはやめろよな。人間もほかの動植物もみんな混じり合って、遺伝子情報を交換しながら、現在の姿になったんだ。その交換を請け負ったのがぼくたちの種族、レトロウイルスだったんだよ」と囁く。このような露わな生物学的な言説も、作品の中に取り込まれているが、必ずしも十分に昇華されているわけではない。

『未確認尾行物体』では、エイズについての科学的知識を踏まえて、エイズがヒトの体内に侵入し、「いい加減な情報を流して、免疫系を大混乱させてしまう」悲劇を、ルチアーンに乗り移られた笹川家の悲劇として描き出している。その意味では、登場人物のルチアーンは、まさにエイズという病気の性質そのものを象徴させたような人物像として表出されている。

「人類の未来にかかわる問題をほんの少しだけ先取りして」描いているところや、エイズの病気としての性質をルチアーンに

仮託して描いているところに、この作品の特質がある。このような実験的な試みについては評価できようが、作品の完成度については問題も残る。特に先程引用した、結末部でエイズそのものに安易に語らせているところについては、もう少しあざとい仕掛けが求められたらだろう。ここには、エイズウイルスの重要性について、改めてエイズそのものに語らせようとする意図や、それまでのエイズにまつわる人間の物語を作者自身によって茶化し、脱小説化する意図も窺えるが、更に巧妙であってもよかつただろう。この言説の直前に、笹川にエイズを感染させたのが、ルチアーノではなく、彼の妻であるという予想外の結末が用意されていたぐらいであるから尚更である。

「ユダヤ系青二才」の中には、主人公「ぼく」の考えとして、「遺伝子は自分のことしか考えていない。ぼくとぼくの遺伝子は全くの赤の他人だ。遺伝子は自分が生き残るためにぼくという機械を利用しては過ぎないのだ。もし遺伝子がぼくのことを見限ったら、ぼくはその瞬間からスクラップになる。だから、ぼくはいいやいやながら、自分の遺伝子とつき合っているんだ。おまけにぼくは遺伝子の奴を雑菌やウイルスから守ってやらなければならない。あいつは他の優秀な遺伝子に較べて、特にデリケートだから、何かというところぼくに拒絶反応を起こさせるのだ。死ぬまであいつにこき使われるかと思うと頭にくる。そして、あいつはぼくの両親の遺伝子から合成されたのだと考

えると、もつと頭にくる」とある。また、「ぼく」を診察した医師は、両親に「遺伝子にも人格を認めておられるようです。複雑な二重人格ですね。御自分で考えたことに肉体が振り回されてしまっている。これは分裂病の患者に多い症例です」と告げる。

だが、その後、パリという空間で、遺伝子の呪縛から解放されて生きるようになる。「三月初め頃には遺伝子にまつわる黒魔術的発想から自由になった。遺伝子による専制政治を打倒し、中枢の内乱を鎮めて秩序を回復し、共和制を打ち立てることに成功したのだ」とある。この作品では、遺伝子とは、主人公の内的葛藤の契機となる要素として描かれている。即ち、遺伝子とは、「ぼく」の中のもう一人の自己、それも遺伝子自身のことしか考えない、「ぼく」とは異質な存在として捉えられている。だが、なぜパリで遺伝子についての病気が治ったのか説明も不十分であり、主人公の苦悩を描き出すための素材として遺伝子が用いられたにすぎないという感も否めない。

「アルマジロ王」の中では、アメリカの大学での友人について「大学三年になるまではまあ分別があったが、やがて佐伯の言動は少しずつおかしくなっていた。五十パーセントは彼の遺伝子の中のノイズによるもので、残り半分は麻薬のせいだ」と記されている。また、主人公について「二億のおたまじゃくしたちのシュプレヒコール！ 彼らはぼくの孤独の代弁者だった。



砂漠をさまよっていても、寝る相手を求める精子。ぼくの可愛い分身、遺伝子たち！」とある。前者では、遺伝的な要因という意味で「遺伝子」という言葉を用いており、後者では、精子のことを「遺伝子」と言い換えている。時代のキーワードでもある遺伝子という言葉に、多義的な意味を込めて使っていることが分かる。

なお、「アルマジロ」については、「いじめられるために生まれてきたような情ない動物だが、ひとたび、体を丸め、よろいに身を包んだら、流れ弾に当たっても死にそうにない。人間も進化の過程でもっといじめられていたら、背中 of 皮膚がよろいのように固くなっていったのだろうか？」とある。表題については、主人公の夢の中に出て来た佐伯の台詞に拠ると、「自由なみなし子が乗る船」の「船长」と説明されている。作品に即して言えば、佐伯や「ぼく」は自由に憧れて生きながら、アルマジロほどの巧妙さを持つていなかったために佐伯は亡くなってしまったということであり、救世主のアルマジロ王は現世では見つからなかったし、必要ないかも知れないということである。帰属すべきところを持たず、モラルにも捕われず放浪するが、そこには束縛もないし救済もないというのである。

## 四

島田にとって、分子生物学の視点は、人間を把握し、造形する上での一つの有効な方法である。分子生物学について体系だった知識を身につけているわけではないが、ヒトが遺伝子の束縛の影響を強く受けているという意識は強い。ヒトの存在が遺伝子に操られているという思い込みの強さが、文学的な想像力を働かせる上で有効に働いている。ただし、そこには生命への畏敬の念というようなものは希薄で、生命を物質の集合体として捉えるところがある。「語らず歌え」には、「人間は細胞の寄せ集めである。人間の営みとは、遺伝子として組み込まれた情報の翻訳作業である。その意味では人間はあざらしやかえると似たようなマシーンということが出来る」とある。人の存在を、物質としてマシーンとして把握している。「未確認尾行物体」には、人間を一個の生身を持った生命体と考えるのではなく、種々のウイルスや細菌、寄生虫と関係を結んだものと捉える考えが登場人物の発言を通して披瀝されている。

島田には、人間の内部の活動を知性的、分析的に把握しようとする傾向があり、それが遺伝子への関心に向かわせた要因であると思われる。学生作家としてデビューした時に、自己固有の文学テーマを特にロシアフォルマリズムと分子生物学に求めたのではなかったか。だから、分子生物学への関心は、昭和六

十年から六十二年の作品に集中している。その後、遺伝子に言及する作品が少なくなっているのは、観念的なテーマで書くことを押さえようとしたことで、なまのなまの観念的な語句やテーマを作品の中で用いなくなったことに因るだろう。

なお、平成八年刊行の『自由死刑』にも、「父は一生をお人好しのまま終えた。金持ちになるにはあまりに財布のヒモがゆるく、偉人になるにはあまりに他人のいうことを信じ易かった。旅の男も似たところがある。父は彼に善男という名前をつけた。お人好しは世襲された。善男は他人に奉仕する遺伝子に操られている。その反動で、本能の赴くまま、感情の炸裂に身を任せ、刹那に生きてみたいなどと思う」とある。父からの遺伝と言ってもよいところを、継続された遺伝子を持ち出すことで新鮮な印象を与えている。もともと、昭和六十年代の作品ほど遺伝子をストレートには扱わなくなっている。また、「他人に奉仕する遺伝子」というものがあることが明らかにされているわけではなく、あくまで文学的なイメージである。

島田は現実社会で起っていることや話題になっっていることに敏感であり、それらを積極的に作品の中に取り込もうとする姿勢がある。現代作家として、都市の最先端の感性を描こうとするだけでなく、時代の最先端のコンピュータや分子生物学にも関心を示している。そのような科学的な視点や言葉を意識的に文学に取り込むだけでなく、想像力も積極的に働かせて近未来

社会を描き出しているところに、島田の文学の特質がある。『天国が降ってくる』のあとがき「メビウスの環を切る」の中で、「人間であり続けることにもはや絶対的な価値がないというのは、心の専門家や物質の専門家が苦心して辿り着いた今日の常識です」とあるところにも、分子生物学が意識されている。

なお、「僕はDNAみたいならせん状に何重にもひねくれている環の外には出られないのさ」「天国が降ってくる」とか、火花について「DNAの二重らせんを思わせるその火花のうねり」「ロココ町」と記しているが、「DNA」を表現のレトリックとしても用いて斬新さや新奇さを出していることが分かる。

小説の方法に自覚的な島田であるだけに、巧妙に戦略的に創作が為されている。構造主義的な視点から見れば、島田の作品の主人公は、他者との関係の中で意識的に演技的な言動を企み、それを快楽とするところがある。構造主義が社会や組織という関係の中での個人に注目して、個人の主体の捉え方に変容を迫り、実体としての人間よりも関係としての人間を重視したが、島田にもこれは当てはまる。つまり、実体、中心、権威を否定して、関係、周辺、大衆へと関心が移っている。

更に、島田の作品の主人公の主体が揺らいでいるのは、そのような外界のみならず、遺伝子によって内界の主体も操られているという認識を持っていることに因る。人間は意識でなく意識以前に操られている。その意識に流れ込んできているものと

して遺伝子を想定している。ただし、科学の理論の上澄みだけが、文学の新しい方法として受容されているかに見える空虚さがあることも否定できまい。

注1 掌編の「龍人誕生」(昭62)でも、タツノオトシゴが「余はかつて地球を支配したドラゴンの末裔じゃ。ドラゴン族は人間族との戦いに破れ、絶滅寸前であった。偉大なる父祖は自らの傷ついた肉体をさらに切り刻み、無数のドラゴンDNAを他生物の細胞に移植し、クローン・ドラゴンを作ることと絶滅の危機を救ったのである。しかし、同じDNAから生まれた子孫同士の交配が続き、ドラゴン族は奇形ばかりを生み出すことになってしまったのだ。父祖たちのあの勇壮にして高貴なる姿は地上から永遠に失われ、ただ海中を空しくさまようタツノオトシゴになり果てたのである」と述べる。

注2 榊佳之との対談「分子生物学者がもたらす老化と死の意味と死生観」(NHK「人体」プロジェクト編『驚異の小宇宙・人体III遺伝子・DNA』平11、日本放送出版協会)

注3 森岡正博との対談「遺伝子が織り成す脳と心の世界」(NHK「人体」プロジェクト編『驚異の小宇宙・人体III遺伝子・DNA』平11、日本放送出版協会)

注4 『自由死刑』(平11)にも、「とりあえず、と続けた。アドレナリンをいっばい出すことだな。さもないと、ひよんなことで死んじゃうからね」とある。ここでも、人間の内部の活動を物質の働きとして捉えている。

注5 柳川弘志「RNA学のおすすめ——生命のはじまりからリボザイム、エイズまで」(平2、講談社)、山本三毅夫・山本直樹『ウイルスVS.人体』(平9、講談社)等参照。

注6 吉田文憲は『未確認尾行物体』について「早稲田文学」(昭63・2)の中で、「エイズ・ウイルスの露呈した『DNA神学』の崩壊という進化論

的なプロセスを、人間中心主義の崩壊した世紀末的病いのメタファとして語りながらそこでその啓蒙的な知識の枠組みだけを忠実になぞりすぎているようにみえる」と述べている。